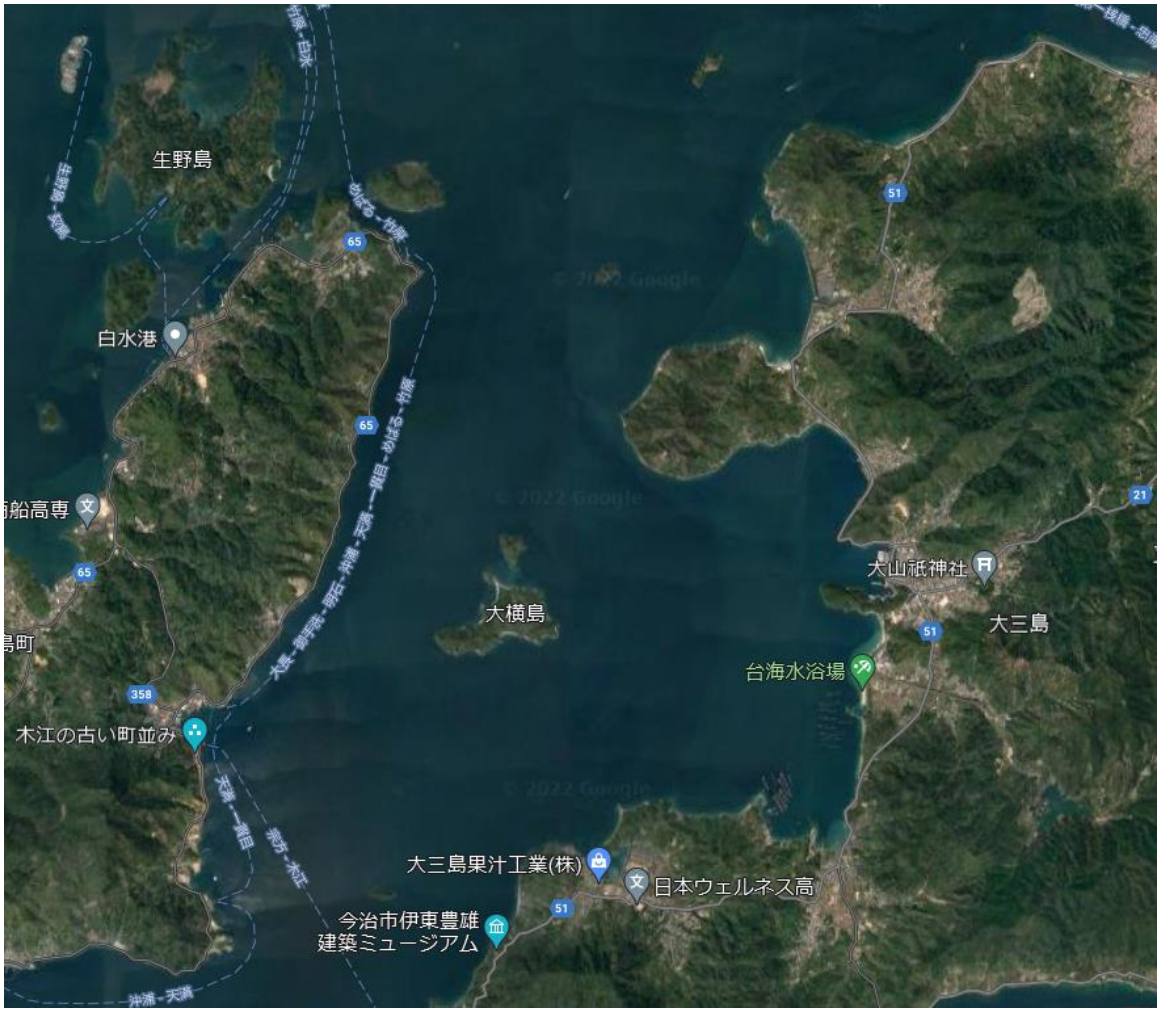
写真アルバムから

シリーズC 寺社華風月　（白黒）

C8 大三島・松山 1975

森隆一



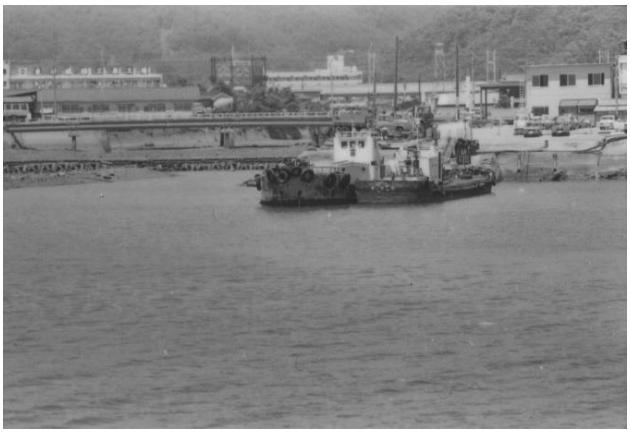
大三島と大崎上島　（Google Mao）

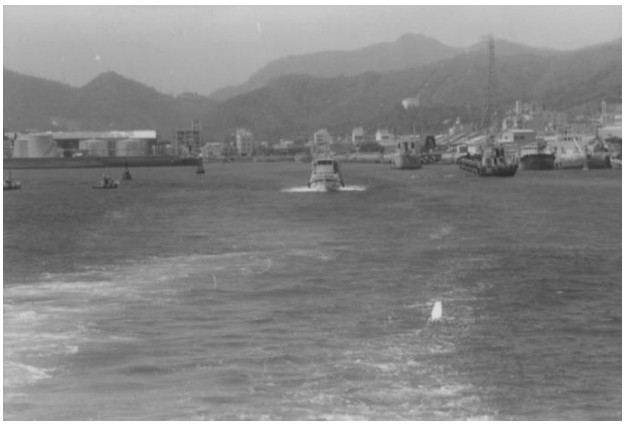
C8. 大三島・松山 1975

大三島で開催されたセミナーの後、四国に渡り、松山から高知までを旅した。ここでは、大三島と松山を取り上げる。

大三島

大三島へは、三原からフェリーに乗ったはずである。表紙の地図で大三島(宮浦)に航路がない。これは、しまなみハイウェイが開通後廃止されたためである。

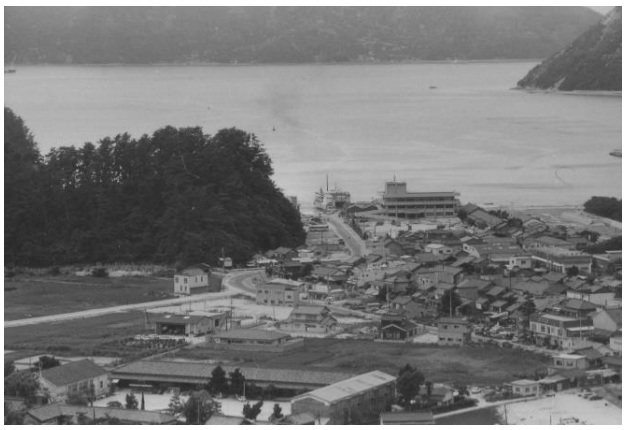




上の写真は出航直後に港を撮ったものである。左の写真の上中央、右の写真の上左に白く写っている細長い建物は、Google Map 画像から、三原市の‘ニシナ運輸 糸崎営業所’に似ている。

次の写真は大山祇神社で撮ったものである。

次の４枚の写真は何処で撮ったのか全く記憶にない。



上の最後の写真は２枚の写真を張り合わせたものである。写真の合成は、フィルム写真の頃は難しくする気がしなかったが、ディジタルでは、同じ露出・シャッター速度と焦点距離で撮影すれば容易に合成できる。

この２枚の写真も何処で撮ったのか全く記憶にない。何か名前がついていても良いような形であると思って撮った。

表紙の地図で、大三島は愛媛県、西の大崎上島と、地図にはないが、東の生口島は共に広島県である。ということで、四国の西岸を南下することにし、松山を目指した。

アルバムからはここで取り挙げた順に訪れたようだが、記憶は曖昧である。アルバムとGoogle Mapを見ながら、この旅行を復元してみる。

まずは大三島から今治に行くことになる。

次の写真の左は今治駅前のようであるが、右は車窓から撮ったような気がするが定かではない。

松山

今治から松山までは、JR を利用したと思うが記憶にない。

宿は、地方公務員共済の愛媛共済会館に連泊した。これを、何時何処で予約したのか全く想い浮かんでこない。松山に着いてから予約した可能性が高い。チェックインしたら、かなり遅くなったので、道後温泉に行ってみた。ここでは、人が多くて、白黒の写真は撮らなかったようである。移動には市電を利用した。

翌日は、午前中をつかって、郊外にある大きな寺で、大山寺に出かけることにした。

大山寺

撮影については全く覚えていないが、次の写真を撮っていた。また、場所を Google Map で確定できなかった。

4 枚のうち、下の 2 枚は鐘楼と、鐘楼から見た本堂と思われる。

松山城

松山城については殆ど知らなかったが、残されている城域の広さに少なからず驚いた。考えてみれば、大藩の居城はこの程度の規模である。本丸へのロープウェイがあるのは岐阜城と松山城の 2 つだけしか記憶にない。

次の写真は、本丸で撮ったものである。

次の写真は天守から撮ったもので、中央やや左の白いビルが宿泊した愛媛共済会館である。

現在では、共済組合の宿舎は名前をカタカナ書きのホテル風の名前に替わっている、

上の写真は宿の部屋から撮ったものと思っている。窓枠にカメラを置いて写した記憶がある。この時、シャッター・レリーズ・ケーブルがあればと思い、後程購入したが、あまり使用した記憶がない。手持ちでは、少々あがいても大差がないのではと思ったことと、バックから取り出しての着脱が面倒であったことによる。今思えば、カメラマンベストを用いていれば、アクセサリをもう少し使ったかもしれない。

石手寺

松山の市街地にある大きな寺ということで行ってみた。

あとがき

松山では２泊したので、撮影に少し余裕ができた。これは、写真を撮ることを主に、合間に観光ができるという過し方である。著名商店街や、撮影禁止のためあまり行かない、寺社・宝物館・博物館・美術館も行くとなれば、もう１日必要となる。ちなみに、欧州では、ストロボを使わなければ、撮影可能な博物館・美術館が多い。石仏は無いが、石像がある。多くは教会などの壁面を飾っていて、路傍のものは見られない。

C4 で小諸城、ここで松山城を取り上げた。

Wikipedia「小諸城」では

城跡は、明治 13(1880)年に旧小諸藩士らが、旧三の門から本丸址までの払い下げを受けて取得し、大正 15（1926）年には、本多静六の指導を受け、当時の小諸町が園地の拡張を行い、史跡の自然景観を活用した公園とした。現在は市営公園小諸城址懐古園として整備、公開されており、入場は有料である。

と書かれている。Wikipedia「松山城(伊予国)」では

松山城は、愛媛県松山市に築かれた日本の城。別名 金亀城、勝山城。松山城と呼ばれる城は同じ現存 12 天守の一つである備中松山城など各地に存在する。本城も伊予松山城と呼び分けられることもある。現在は、城跡の主要部分が公園として

整備され、大天守を含む21棟の現存建造物が国の重要文化財に、城郭遺構が国の史跡に指定されている。そのほか、連立式天守群の小天守以下5棟をはじめとする22棟(塀を含む)が木造で復元されている。天守は江戸時代後期に再建されたもので、現存十二天守の中で最も新しい。

山頂に本丸、南西麓に二之丸、続いて三之丸。北麓には北曲輪、南東麓に東曲輪がある。三之丸は比高6メートルほどの土塁で囲み、北と東に石垣造の虎口を開く。本丸から二之丸にかけて登り石垣を築いて囲み、丘陵斜面からの大手城道への侵入を防ぐ構造としている。山頂の本丸北部には本壇という天守曲輪を持ち、大天守と小天守・南隅櫓・北隅櫓を3棟の渡櫓（廊下）で連結し連立式天守をなしている。松山城の中枢は二の丸で、藩主の生活の場である御殿や庭園、茶室などがあった。三の丸には身分の高い家来の屋敷が建ち並んでいた。本丸は主に倉庫として使われていた。

明治時代に廃城となった城と残された城があったことは知っているが、詳細は殆ど知らない。

Wikipedia「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」では次のように書かれている。

1873年(明治6年)に明治政府において、太政官から陸軍省に発せられた太政官達‘全国ノ城廓陣屋等存廃ヲ定メ存置ノ地所建物木石等陸軍省ニ管轄セシム’の件お

よび、同じく大蔵省に発せられた太政官達‘全国ノ城廓陣屋等存廃ヲ定メ廃止ノ地所建物木石等大蔵省ニ処分セシム’の件の総称。陸軍が軍用として使用する城郭陣屋と、大蔵省に引渡し売却用財産として処分する城郭陣屋に区分された。単に廃城令、城郭取壊令または存城廃城令と略されて使用されている場合が多い。

太政官から達として陸軍省および大蔵省に発せられた文書で、今まで全国の城郭の土地建物については、陸軍省所管財産であったが、今後陸軍が軍用の財産として残す部分については存城処分、すなわち引き続き陸軍省所管の行政財産とするも、それ以外については廃城処分、すなわち大蔵省所管の普通財産に所管換えし、大蔵省において処分すべきものとした。

この場合の存城処分＝陸軍省行政財産とは旧城郭陣屋を、現在の概念である文化財として土地や建造物を保存しようとするものではなく、陸軍の兵営地等として旧来の城郭建造物、石垣、樹木等を整理すべしとしたものである。その後、陸軍の兵営地とする目的で城郭建造物がすべて取り壊された若松城の例がある一方、一部の建造物が取り壊され、陸軍施設が設置されたが、天守等の主要な建造物やほとんどの遺構が現存し、国宝、特別史跡になっている姫路城の例がある。例外的に、存城処分として陸軍用地となった城郭であっても、彦根城のように、明治政府の特例政策として城郭の土地と建造物が保存され、国宝、特別史跡となっているものもある。

また、廃城処分とは大蔵省の普通財産に所管換えし、地方団体や学校敷地等として売却するための用地となったものである。全国のほとんどの城郭陣屋の建造物が

取り壊され、土地は払下げられた。ただし、犬山城や松本城のように、建造物が売却、取壊しの対象になったが、それぞれの理由により現存し、国宝、史跡になっているものもある。

後に、1890年(明治23年)になって、陸軍省用地としたものの不用になった城郭である土地が、元藩主や地方団体に限り、公売によらず相当対価をもって払い下げられることもあった。‘旧城主は祖先以来数百年間伝来の縁故により、これを払い渡し旧形を保存し、後世に伝えるなら歴史上の沿革を示す一端となり好都合である’ことを理由とした。‘史跡としての文化財保護’のさきがけといえるが、史跡の法的な保護制度は、1919年(大正8年)制定の史蹟名勝天然紀念物保存法を待たなければならない。

この後、存城処分と廃城処分の一覧が記載されている。両者を合わせれば300弱となり、江戸時代にあった、城と陣屋の一覧になるはずである。

存城処分

二条城	大坂城	兵庫	津城	名古屋城	豊橋城	静岡城	山梨城
小田原城	東京城	木更津	佐倉城	水戸城	彦根城	大津	岐阜
高崎城	宇都宮城	白河城	若松城	仙台城	水沢	盛岡城	青森
山形城	秋田城	福井城	敦賀	金沢城	七尾	新潟	新発田城

高田城　豊岡　鳥取城　松江城　浜田　姫路城　岡山城　広島城

山口城　和歌山城　徳島城　丸亀城　高松城　松山城　宇和島城　須崎浦

福岡城　小倉城　千歳　長崎　熊本城　飫肥城　鹿児島城　厳原城　首里城

廃城処分

淀城　郡山城　高取城　柳生陣屋　小泉陣屋　田原本陣屋　柳本陣屋

芝村陣屋　櫛羅陣屋　狭山陣屋　丹南陣屋　岸和田城　伯太陣屋　吉見陣屋

尼崎城　高槻城　三田陣屋　麻田陣屋　伊賀上野城　長島城　桑名城

亀山城　神戸城　松坂城　田丸城　菰野陣屋　久居陣屋　鳥羽城

犬山城　岡崎城　挙母城　刈谷城　西尾城　田原城　浜松城

横須賀城　掛川城　沼津城　田中城　岩槻城　忍城　大多喜城

久留里城　佐貫城　結城城　古河城　関宿城　土浦城　下館城

松岡城　笠間城　膳所城　水口城　西大路陣屋　山上陣屋　大溝陣屋

宮川陣屋　大垣城　加納城　岩村城　郡上八幡城　苗木城　高須陣屋

野村陣屋　須坂陣屋　松代城　小諸城　岩村田陣屋　龍岡城　高島城

高遠城　飯田城　松本城　館林城　安中城　沼田城　岩櫃城

伊勢崎陣屋　小幡陣屋　七日市陣屋　烏山城　黒羽城　大田原城　平城

湯長谷陣屋　棚倉城　守山陣屋　泉陣屋　三春城　坂元城　小堤城

二本松城　白石城　角田城　船岡城　福島城　岩出山城　岩沼城

涌谷城　高清水城　一関城　岩谷堂城　金ヶ崎城　宮津　花巻城

八戸城　七戸城　黒石陣屋　大泉城　新庄城　上山城　天童陣屋

米沢城	酒田城	本荘城	亀田陣屋	矢島陣屋	岩崎陣屋	大館城
横手城	松嶺城	小浜城	大野城	勝山城	丸岡城	鯖江陣屋
大聖寺城	富山城	三日市陣屋	黒川陣屋	上山藩七日市陣屋		峰岡陣屋
村松城	与板城	椎谷陣屋	清崎陣屋	相川陣屋	柏原陣屋	篠山城
福知山城	綾部陣屋	山家陣屋	園部城	亀岡陣屋	峰山陣屋	舞鶴城
宮津城	出石城	村岡陣屋	米子城	広瀬陣屋	母里陣屋	津和野城
明石城	三日月陣屋	林田陣屋	龍野城	安志陣屋	三草陣屋	山崎陣屋
小野陣屋	赤穂城	津山城	真島城	浅尾陣屋	成羽陣屋	足守陣屋
庭瀬城	高梁城	新見陣屋	岡田陣屋	鴨方陣屋	福山城	岩国城
徳山陣屋	清末陣屋	豊浦城	萩城	田辺城	新宮城	洲本城
多度津陣屋	西条陣屋	小松陣屋	新谷陣屋	大洲城	伊予吉田陣屋	
秋月城	久留米城	柳川城	三池陣屋	中津城	千束陣屋	豊津陣屋
佐伯城	府内城	臼杵城	岡城	杵築城	日出城	森陣屋
唐津城	島原城	諫早陣屋	大村城	平戸城	鹿島城	小城陣屋
佐賀城	蓮池城	福江城	八代城	宇土陣屋	人吉城	高鍋城
延岡城	佐土原城	武生水陣屋				

上のリストで、城のないものが幾つか現れている。説明がないが、城ではないが含まれている。代官の屋敷(官舎)である陣屋や1万石に満たない武士の屋敷などが、陸軍省の管轄にされたものと考える。

松山では市電が走っていた。C2 章と C6 章で京都市電について触れた。観光者にとっての市電の利点は全ての停留所に止まることと遅い(加減速に時間がかかる)ことであるが、観光客以外には欠点にもなり得る。

近年 LRT の設置が幾つかの所で検討されている。渋滞解消の対策として撤去された粗面電車が、渋滞解消のために検討されていることになる。バイパスが整備され、LRT が検討されている道路の通行量が減っても物流に多きな影響が生じなくなったことによることであろう。問題は、予定される LRT の沿線に人を呼ぶ施設をそろえられるかでないかと思う。施設としては、病院・官公庁・文化施設・商店街などであろう。官公庁は本体はなくてもよく、窓口業務の殆どをこなせるスタッフと設備があればよい。かってスーパーが広まり始めたとき、アレンジされたものを陳列し補充するだけの小売店はすたれ、残るのは専門知識をもった小売店だけであろうと考えたことがある。このような商店街でも生き残れるかは難しいかもしれない。

Wikipedia「日本の路面電車一覧」にある表

業者名　旅客案内上の名称　　開業年　　総延長(Km)　　軌間(mm)

札幌市交通事業振興公社　札幌市電　　1918 年　　8.9　　1,067

2020 年 3 月までは札幌市交通局が運行

函館市企業局交通部　函館市電　　1913年　　10.9　　1,372

2011年3月までは函館市交通局が運行

東京都交通局　都電　　1903年　　12.　　1,372

東急電鉄　世田谷線　　1925年　　5.0　　1,372

東急電鉄の軌道線の開業年は1907年

富山地方鉄道　富山軌道線・富山港線　　1913年　　8.7　　1,067

富山港線の鉄道線区間を除く

万葉線　葉線(高岡軌道線)　　1948年　　8.0　　1,067

鉄道線である新湊港線を除く、2002年1月までは加越能鉄道が運行

豊橋鉄道　豊鉄市内線　　1925年　　5.4　　1,067

福井鉄道　福武線　　1933年　　3.4　　1,067　　福武線の鉄道線区間を除く

京阪電気鉄道　大津線　　1912年21.6　　1,435

京阪電気鉄道の軌道線の開業年は1910年

やや小振りな普通鉄道規格の車両による運行京

京福電気鉄道　嵐電　　1910年　　11.0　　1,435

阪堺電気軌道　阪堺電車　　1911年　　18.3　　1,435

岡山電気軌道　岡電　　1912年　　4.7　　1,067

広島電鉄　市内線　　1912年　　19.0　　1,435　　鉄道線である宮島線を除く

とさでん交通　とさでん交通　　1904年　　25.3　　1,067

2014年9月までは土佐電気鉄道が運行

伊予鉄道　松山市内線　　1911 年　　6.9　　1,067　　鉄道線である城北線を除く

長崎電気軌道　長崎電気軌道　　1915 年　　11.5　　1,435

熊本市交通局　熊本市電　　1924 年　　12.1　　1,435

鹿児島市交通局　鹿児島市電　　1912 年　　13.1　　1,435